

令和3年度 千葉県高等学校総合体育大会 サッカーの部 総評

令和3年6月12日(土)、13日(日)、19日(土)、20日(日)の日程で千葉県高等学校総合体育大会サッカーの部決勝トーナメントが行われた。先に行われた一次トーナメントの結果を踏まえ、16チームが全国総体千葉県代表の1枠をかけてトーナメント方式で試合を行った。

流経大柏、専大松戸、暁星国際、習志野がベスト4に進出し、準決勝が千葉県総合SC東総運動場と岩名運動公園、決勝が東総運動場にて行われ、優勝が流経大柏、準優勝が暁星国際という形で令和3年度千葉県総体の幕が閉じた。流経大柏は8月13日(金)から福井県で行われる北信越総体2021に出場する。

今大会は、関東大会出場の日体大柏が決勝トーナメント1回戦敗退、プレミアリーグ所属の市立船橋が準々決勝で敗退となった。関東大会の1週間後に各都県の総体決勝トーナメントが行われる過密日程で、連戦の疲労や怪我の影響はないとは言い切れなかった。

戦い方に関しては、堅い守備ブロックを形成し、少ない人数でスピードを生かしカウンターを狙う戦い方で勝利を収めるチームが目立った。その堅い守備ブロックを流れの中で崩すアイデアが課題であった一方、オリジナリティのあるセットプレーでフリーな選手を意図的に作り出したり、ロングスローによる高さを武器とした攻撃を仕掛けたりして得点できることが勝負の鍵を握った。

守備を固め少ないチャンスを狙うチームは増えたが、相手をよく観察し、ジャッジを変えられる選手が増えて欲しい。また、自チームのスタイルを貫き戦う個性的なチームは減ってきている。そうしたトーナメント戦の難しさの中でも、カラーを出せるようなチームを増やすと同時に、得点感覚に優れた個性的な選手を発掘・育成することも課題と言えるだろう。

4大会ぶりの優勝となった流経大柏のインテンシティの高さは圧倒的であった。FWの川畑、MF渋谷を中心に、縦に速い攻撃で、スピードに乗ったサポートから数的優位を作り、スピードに乗った突破もできる。2トップも良い距離感で関わり、個人でも背後を取ってチャンスメイクすることができた。ボールロスト後も強度の高い守備から、カウンターへの移行も速く、ボール奪取後のオーバーラップも相手の脅威となっていた。無失点はもちろん、シュートすら打たせないという気迫が感じられた。

新型コロナウイルスによる影響で昨年度の総体が中止となった中で、大会を開催できたことは喜ばしいことであった。無観客や入場者の制限をしながら、会場役員や審判、記録の方々を始め、多くの方々のご協力によって進めることができた。全ての方々に感謝の意を表すとともに、流経大柏の本総体での活躍を期待し、令和3年度千葉県総体の総評とさせていただきます。